

眼前の石



mikatuki98

それはそれは、とてつもなく大きな石だった。

見上げるほどの大きな石は、まるで岩と呼んだ方がよいくらいだろうか。

大きな石の前には一人の男が居て、両の手に握りこぶしを作ったままそれを見上げていた。

そのうち男の身体が小刻みに震え始めた。

「……」

男は何か呟いているようだがよく聞き取れない。

すると男は突然がっくりと項垂れ、地面に跪いた。

そこへ一匹の野良犬が通り掛かり一声「わん」と鳴くと、男を尻目になんと大きな石に向かって左脚をピンと跳ね挙げ、用を足し始めたではないか。

ところがそれを見た男は何を思ったのか、すっと立ち上がると天を見上げ大きな声で笑い始めた。

「わっはっはっはっはっ」

男の笑い声はだんだんと大きくなっていく。

「わっはっはっはっはっ」

遂には地響きし始めた。

そのせいで先ほどの犬は恐怖のあまり何処かへ走り去り、近くの木々に留まり囀っていた鳥たちもばさばさと音を立て慌てて何処かへ飛んで行ってしまった。

それでも男は笑い続けている。

「わっはっはっはっはっ」

そして気が付くと男の目の前にあった大きな石も粉々に砕け散っていた。

そこへ今度は旅の行商人が都合よく竹細工のざるを持って通り掛かった。

「おい旅の者、そのざるを一つ売ってくれ」

旅の行商人はこれ幸いと一番大きなざるを差し出したが、男はすんなりと一番大きなざるを買うと、粉々に砕けた目の前の石をふるい始めた。

無心に石をふるう男。

男は細かな砂状になったものだけを集めると、持っていた大きな麻布に詰め込んだ。

男は大きく息を一つ吸い込み、重たくなった麻袋を肩に担ぐ。

肩に乗せた麻袋はかなり重いのか、男は何度か重さを確かめるような素振りを見せていたが、納得したように一つ気合を入れた。

「よし」

そして再び天を見上げると、今度は天を揺るがすばかりの声で叫んだ。

「ありがとうございます」

男は何かしらの悟りを一つ得て、東の方角へ向かって勇んで歩み始めたのだった。了